

事業のタネシート

活動地域・団体名：大町PF・荒山林業 / on the Lake

事業名称 1 : Lakeside woodman's club

あらすじ

北アルプス地域は面積の84%が森林と森林資源が豊富である。中でも森林面積の7割を落葉広葉樹主体の天然生林が占めるが、地域内に製材や乾燥技術、流通拠点がない為付加価値の低い原木の状態域外に買われていき、資源としては豊富にあるものの産業としては産業付加価値額が大町市で農業の1/5程度と低い水準にある。また、労働生産性が長野県平均と比べても低く、全国平均からは約40%も低い水準となっている。このことから山林を持っているメリットを感じられない所有者が域外の業者の開発行為に乗じて土地を売ってしまったり、持っていて何にもならないというムードを作り出しており、豊かな自然資源があってもそれ以上の帰ってくる動機が薄いことから若者が学卒のタイミングで転出超過に転じる要因にもなっている。また、長野県は教育県とも言われているが一方で不登校数や若者の自殺者数も多いという暗い影を落としている。見通しの効かない時代に学校に通わない選択をした子ども達の居場所の創出や生きていく力を身につける場としての選択肢を提供したい。

ストーリー

こうしたムードを変え、木材を付加価値の高い状態で地域内循環させていくことで地域内での利益循環構造をつくり、ひいては水どころであるこの地域の水循環も守りたい。その為には木材を原木から加工できる状態にする製材・乾燥設備と流通拠点が必要である為、その整備をしたい。流通拠点を整備することで雇用を生み出し、地域内でワンストップで加工度を上げる仕組みやデジタルファブリケーションを用いたものづくりによってゼロからイチを生み出すことのハードルを下げ、若者が地域内に自然資源以外の社会的観点、経済的観点からベネフィットを感じるきっかけにしたい。

また、年間103万円と言われている林家の収入は丸太や製材品では市場相場と完全に切り離すことはできない。その為所有林での限られた面積での林業では林家のモチベーションを上げられず、資産として立木を見たときに収入が望めないことから経営意欲の低下を招き、手入れが滞るといったことが起こる。中でも組織形態別林業経営体数の内約8割は山林所有者などの個人経営体であることから（2020年農林業センサス）、公益的機能のあるこの個人経営体の所有林の手入れを進めるには、この層に山林への関心を再び向けさせる必要がある。

その方法としてデジタルファブリケーションを用いた製品開発やそこに共同体的なプラットフォームを形成することで市場価格に左右される木材としての売り上げではなく、最終製品からの利益分配というモデルを構築したい。

また山林所有者が世帯ごとの経済的利益還元へフォーカスするのではなく、若い世代への投資として木材生産を行うという直接的な貨幣ではない投資マインドを醸成したい。

事業の骨子

現時点で想定される 課題・ボトルネック

<p>①ありたい未来</p>	<p>地域内循環のボリュームを増やすことで森林を管理する担い手や山林所有者、地域木材を使う使い手が今よりも経済的に暮らしが成り立っている状態や幸福度の高い状態をつくる。 森林が適切な状態で循環することで足を踏み入れて心地よい山をつくり、水資源を守り、ウッドマイルージ削減にも寄与する。 子供や若者や自己決定ができ、生きていけると安堵できる未来をつくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・拠点整備の為の資金調達 ・主体となる組織体制の強化
<p>②課題</p>	<p>今年度一年の動きとして木材乾燥のデータ収集は進んだが、やはり丸太や製材品に加工するだけでは停滞している木材市場取引価格に比べて経済的なインパクトがそれほど大きくない。 それでも市場が価格決定権を持っている状態からは進歩だが、健全な循環を生み出すにはもう一步踏み込んだインパクトが必要である。</p>	

③なぜこの事業をやるのか (Why)	<p>本来自然資源とその地域に暮らす人の営みは切っても切り離せないものである。産油国が経済的にも豊かであるように、地域にある資源によって地域が経済的な恩恵を受ける仕組みを再構築する必要がある。それには需要に任せて低水準の価格で丸太原木や製材品を地域外へ卸すのではなく、高単価での地産外消または域内循環を目指す必要がある。同時に地域材が高付加価値で循環することで経済と一緒に地域資源への自覚的なエデュケーションにもつなげ、持続可能な環境・経済社会を目指したい。</p>	
④地域資源	<ul style="list-style-type: none"> ・北アルプス地域の面積の約84%を占める森林資源 ・中でも豊富な広葉樹資源 (広葉樹主体の天然生林が全国平均では50%程度であるのに対し、北アルプス地域は約7割が天然生林) ・地域内数カ所にある製材所 ・林業の担い手 ・地域材流通について当事者意識を持った地元木工家 ・広葉樹活用をテーマに掲げる北アルプス地域振興局 	
⑤商品・サービスの具体的な内容 (What)	<ul style="list-style-type: none"> ・トレーサビリティが切り株まで辿れる地域木材を使った地元木工家による木工作品 ・デジタルファブリケーションによる地域材工務店機能とワンオフから作れる地域材プロダクト ・on the Lakeや地元のゲストハウスなどが行うエコツアーとの連携による商品開発 ・若者や子供達の能力開発や居場所創出を地元の森林所有者が丸太で応援するファンド ・地域で他にない人工木材乾燥設備と乾燥技術 ・他地域の地域材や広葉樹活用をしているプラットフォームとの連携によるネットワークやナレッジ共有 	
⑥担い手 (Who)	<p>地元木工家、林業者、森林組合などで新たに主体団体を立ち上げる</p>	<p>課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像</p>
⑦事業で生じる循環	<p>地域木材資源の利用による森林・経済・水循環 乾燥工程によって生じる熱の複合利用 木材加工時に出るおが粉→地元有機農家の肥料に</p>	<p>北アルプス森林組合 大町市役所 ゆーぶる木崎湖 地元木工家</p>
⑧事業で生じる成果	<p>環境：適切な管理による森林循環、水資源循環、景観保全、生物多様性保全、ウッドマイレージ削減 経済：地域内での高付加価値型の木材循環により山林所有者、林業者、製材加工業者、木工家の森林木材起因の所得水準向上 社会：諦観ではなく森林に対して誇りを持っている状態、ムード若者が地域に残留、またはまた戻ってこようと思うマインド形成</p>	<p>北アルプス地域振興局 VUILD 飛騨コンソーシアム</p>

事業名称 2 : on the Lake		
あらすじ		
<p>大町市には仁科三湖という三つ連なった湖がある。台湾の日月潭やスイスのラヴォー地区など、湖畔エリアは世界的にみても貴重な観光資源として経済循環のハブになっている。世界的にも名の通ったスノーリゾートである白馬の南に位置する動線を生かし、湖畔のエリアの魅力を外に向け発信し、この地域の自然が好きな関係人口を増やす為の滞在型のカリキュラム“Life”と、地域内の自主勉強会のような“Lab”の2つの取り組みを行う。今年度プロトタイピングとして本事業の枠組みで行なった。</p>		
ストーリー		
<p>豊かな自然資源がある仁科三湖エリアだが、昔栄えた面影を残すものの寂れた空気を醸し出しているエリアもある。しかし、都市景観のような開発がなされるのではなく豊かな緑などの自然環境と調和した景観が仁科三湖固有の資源である。海外からの旅行者や国内の他地域の人間から見たときにも魅力的なこの仁科三湖エリアの森と湖の暮らしや遊びを発信し、湖畔のプレーヤー同士もよりつながるon the Lakeというプラットフォームとして事業を実施し、集まった人が商品開発やサービス開発、イベントや交流会などを自ら行うようになっていく場をつくりたい。</p>		
事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	湖と湖畔に住む人々が誇りを持っている状態 湖畔のにぎわいにより関係人口が増加し、生き生きとはたらき暮らす人々によって豊かな景色がより彩られている	<ul style="list-style-type: none"> ・旅行業法などが複雑化しているので今後は近隣宿泊業者と提携して実施を検討 ・昨年度も書いたがやはり経済的な持続性としてはこの単体の事業だけでは難しいので、他の事業やステークホルダーとの協同や、大町市と共同開催などを視野に入れたい
②課題	経済的な持続性	
③なぜこの事業をやるのか (Why)	事業をやることで関係人口の増加を図り、湖畔エリアの自然資源が好きな人が集まり、つながる仕組みを創りたい。	
④地域資源	木崎湖、中綱湖、青木湖（仁科三湖）、湖畔のキャンプ場、キャンプ場が提供するサウナやSUP、カヌーなどの体験、足を踏み入れて心地よい森林、湖畔のプレーヤー、四季折々の景色、木の伐採を体験できるフィールド 事業1が実現したら連動して相乗効果が期待できる	
⑤商品・サービスの具体的な内容 (What)	<ul style="list-style-type: none"> ・仁科三湖エリアの森と湖に親しみながらお金を稼ぐ以外の手で暮らしをつくる手ごたえを体験して貰う滞在型のカリキュラム ・長期的には湖畔の有機稲作農家やキッチンカーなど、湖畔のプレーヤーなどから派生したプロダクトなどの商品 ・ここの自然とプレーヤーじゃないと経験できない唯一無二の体験 	
⑥担い手 (Who)	<ul style="list-style-type: none"> ・on the lake事務局 ・やまとわ（企画協力） 	
⑦事業で生じる循環	<ul style="list-style-type: none"> ・つながりが生まれることによる耕作放棄地の減少、景観整備が進む（草刈り、新規就農、フットパス整備） ・企画に人が集うことで自然に対話の機会が増え、新しいプロ 	
⑧事業で生じる成果	<ul style="list-style-type: none"> ・湖畔の暮らしを魅力的に感じえる関係人口の増加 ・市役所の湖畔エリアへの注目度アップや整備強化への期待 	
		<ul style="list-style-type: none"> 課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像 ・やまとわ奥田さん ・大町市企画財政課 ・定住促進係 ・Labの講師となれる人 ・事業のタネ①との連携